

初級和声学習プログラム開発

— 鍵盤和声課題と手引き —

山本 純ノ介

千葉大学・教育学部

Development of learning program for the law of beginners' course harmony

— Keyboard harmonic problem and guide —

YAMAMOTO Junnosuke

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本論は初級和声を短期間に修得するための課題とその実施方法を示している。

初級段階で悶々とする学生に、弾く課題を与えると和声への興味を取り戻す人を多くみている。本論は鍵盤を用いた演奏実技課題を中心に解説するので、鍵盤実習経験が豊富なものは付録の課題集を順次弾き、移調、移旋するだけでもソルフェージュ能力、楽典の開発に効果がある。

詳細な和声理論は重要で、併行して理論書の課題を確り実施する作業は怠れない。既存の理論書を推薦しているので併用すると良い。

長く、作曲専門養成、教員養成、愛好家、様々な人に初級和声を伝授してきた。独学で臨む方も結構居られるので、できるだけ容易に鍵盤上で和音を弾けるように配慮した。

和声の妙味は自らがしたためた音符を鍵盤で演奏しその響きを耳で確かめる自問自答作業である。これらは音楽の原点と言えよう。音楽は「創り」「歌い」「聴く」という何気ない作業の繰り返しから始まっているから。

キーワード：和声 (Harmony) 対位法 (Counterpoint) 作曲 (Composition)

ソルフェージュ (Solfeggio 伊, 標準音楽辞典p650) 音楽教育 (Musical education)

序論と目的

本論は、私が思春期に「和声」の奥深さを意識し、あらためて学び直す意欲を持った時、理論的、体系的に「和声」を理解する上で非常に役立つ実践方法に基づいている。つまり実際に自分が課題を実施し添削してもらいながら進むと同時に弾く課題、外声課題を鍵盤によって定型として身につける作業を併用することである。課題実施の理論書は数多く出版されているが、定型として弾き覚える方法をやさしく示したものは見当たらない。ここでは極めて初期段階から属七和音の転回形までの定型修得方法を示し、机上の理論は既存の書に託す。初級和声履修の最初期段階で定型を移調、移旋することからはじめ、しだいに外声課題を弾かせる手法は、現在も千葉大学教育学部音楽科の学生1~2年を対象にした教員養成課程での初級和声指導方法として効果を上げている。

一般的に和声の実習は、学習書から規則、記号、声部進行等を理解して五線上に与えられた課題を書面に実施する。それをレッスンなどで教師が添削する。実施された課題は、しばしば、新たなソプラノやバスのラインを教師から与えられ再度実施し先へ進む、という問答のような作業に発展する。

本論ではまず、基本編では「弾く課題」、実践編では「外声課題」と称し、鍵盤で四声体和声を弾く作業を解説し

ている。和声の基本規則を書面から得ると同時に鍵盤で四声体和声を弾き聴覚からも確認する作業がとても重要だ。頭脳理解だけでは不十分である。また学習者の理解能力、鍵盤演奏能力には大きな差があるので個人指導を基本とする。書面実施だけでは作曲専攻生でも初期の段階では音と禁則関係等、理論と実践の相互理解が進まないことがある。実際の声部進行や規則の文言が一体化し鍵盤でそれぞれの定型や進行が己の指で無意識に動くようになるまで復習(さら)う必要がある。

和声の幅広い概念、至宝な和声感覚を身につける上でソルフェージュ(音楽基礎訓練による実践の積み重ね)能力の開発が最も大切であり、定型の積み重ねを和声入門とすることに異議を呈する方がいることは承知している。しかしあえて十八歳前後で初めて「音楽」「鍵盤」と出会う者、まして「和声」にはじめて出会う音楽初心者や和声初心者への指導、教育を考えたとき、和声を通じた問答の面白さ享受するためには、このような定型による「弾く課題」「外声課題」を併用し聴覚と指からの作業を併用することが最も近道である。対象者は、ある程度の音楽知識がある大学生、藝大、音大などで作曲専門ではない副科和声で短期間に初級和声修得を目指すものたちである。勿論音楽家早期育成のソルフェージュ基礎訓練の初期課題としても良い。結果的に大譜表の読譜力、様々な調性への対応力が高まっていくという副産物がある。更に楽典(音楽理論の基礎事項)の捕捉をしながら進むことも可能であり、より発展的な指導が考えら

連絡先著者：山本純ノ介 junmusic@faculty.chiba-u.jp

れる。個々に示した課題は東京藝術大学や学芸大学で教鞭をとられていた故北村昭先生の課題に私が手を加えた。また我々の年代が受験期に親しんだ、音楽之友社刊「和声、理論と実習」第一巻。いわゆる赤本の課題と類似していても、そのまま掲載した。基本形から属七の転回形まで、初級和声を半年から1年での修得を目的としているが個人差は否めない。しかし鍵盤和声の修練とともにバス、ソプラノ課題の実施を経て、ガロン、シャラン、ビッチ、等の課題を実施する妙味を味わい、更に対位法への造詣を深め若き日のドビッシューやメシアンなどが実施した学習フーガなどへと興味が広がることを願っている。

1. 鍵盤和声実施方法と既存教科書について

本論はもっぱら鍵盤により、和声の定型進行の確認を繰り返し弾く作業のガイド、手引として機能することを優先する。また付随してその都度重要な和声概念などは解説した。

裏付けとなる理論書は和声「理論と実習」の第I、II、III巻（音楽之友社刊）であるので、熟読され課題実施されたい。和音記号やその転回形の示し方はいわゆる、藝大和声に基づいている。総合和声（音楽之友社刊）等の併用でもよい。但し課題の留意点などでは赤本（I巻）、黄本（II巻）、緑本（III巻）の該当事項をページで示すようにしてある。例；（赤p34参）

各課題の到達目標は、まずはバスを弾き、対するソプラノの動きを覚えながら内声を加え四声体和声を弾く。同時に自らの耳で和声固有の「響き」を味わい、和音進行の「移り変わる色合い」空間の「唸り」や「調和」などを吟味しつつ、各声部間のバランスを整える工夫をしながら弾く。これは誠に重要であり、先ず自らが「聴く」。そして誤りがあれば手直しし、また弾き、聴く、この、自問自答の作業から耳の熟達が得られる。この循環を理想とする。

2. 弾く課題の実施

〈課題①〉

基本定型

基本形による主要三和音（赤p13）、副三和音の連結。その移調と移旋

do do do re si do

C:I VI IV II V I

（留意点）

先ず音階上にできる七つの和音から上記五種類の和音連結を弾き覚える。（IIIとVIIは機能の所屬が曖昧又は使用法により機能が異なるので初期段階では省く）

共通音の保留を含む連結と共通音がありながら保留しない連結を含む重要な定型である。

将来技術が向上したならば、それぞれの三和音の前に借用和音、いわゆる副五の和音（緑p45）を挿入して復習（さら）いなおすという課題も推奨しておく。

I度からVI、IV、II度までの連結では共通音を同じ声部で保つ「保留」（赤p31）をおこなっている。

II度からV度和音への進行では共通音reは保留せずにII度のreはV度の最も近い第三音・導音・siへ下降させ、配分を一致させる。その後、導音・siは必ず主音・doへ解決させる。このソプラノの動きが西洋音楽の根幹となっている。re→si→do（赤P34）

バロックのフーガや現在の音楽など実作品では様々な理由で導音が主音へ解決しない事例もあるが、V度→I度の進行では、初歩段階では先ずどこかの声部で導音が主音へ進行する動きを意識し励行する事が重要である。規則を破る事は感覚を優先することになるので確かな感性の持ち主でなければ、または初級和声指導ではこれを徹底すると良い。そのためIII度など幅のある和音を初心者には扱わない。

I、VIはT・トニック。調性の中で安定感を示す。

IV、IIはS・サブドミナント。発展的な印象をもたらす。

VはD・ドミナント。持続力を示すと同時に導音の存在が主和音への解決を促す。

属七に発展すれば導音と第七音の間に生まれる三全音・トリトヌス（標準音楽辞典p799）がより強く主和音への解決を要求するようになる。故に半終止ではV度を用いる事でその後の自由な連結の可能性を残す事ができる。しかし終止感を高めたい時は属七を用いてより強い主和音への帰属を示し、主和音への各声部の流れを作る。

基本形の三和音と副三和音の各々の響きを確認、連結と進行の縦軸、横軸それぞれの響き、流れを良く聴く。特にV和音の導音が主音へ解決する動きは重要である。

手順1：上記Cdur・ハ長調の課題を弾く。

初心者のために以下、片手ずつによる手順を示す。指番号は一般的なテキストに準ずる。

鍵盤楽器初心者は片手ずつ、以下の予備手順を行い、随時両手で演奏する。

左手の練習

①左手でII 7（にどしち）の和音を押さえる。手順は以下のとおり。

親指・1の指でc・ド、人差し指・2にaラ、薬指・4にf・ファ、小指・5にd・レを配置し和音やアルペジオ（分散和音）で弾けるようにする。

②1の指から順にアルペジオで下降する音型を任意に練習すると良い。

③ドミナント・属音・g・ソを1の指で押さえる。

④次にトニック・主音・c・ドを5の指で押さえる。

⑤この③④上記二音を再び②の手順のように復習う。

⑥最後に一連のバスの動きとしてドーラファレソドー。と一定のテンポで与えられたリズムに従って弾けるまで復習う。

右手の練習

①トニック・Iの和音を押さえる。小指・5にc・ド、人差し指・2にg・ソ、親指・1にe・ミと配置し同時に三和音として弾く。

この際左手練習で行ったように分散和音で指を動かし

てみると良い。

- ② トニック・Ⅵの和音を次に押さえる。5の指にc・ド、3の指にa・ラ、1の指にe・ミと弾く。
- ③ サブドミナント・Ⅳの和音を押さえる。4の指にcド、2の指にa・ラ、1の指にf・ファ
- ④ サブドミナント・Ⅱ和音を押さえる。5の指にd・レ、2の指にa・ラ、1の指にf・ファ
- ⑤ ドミナント・Ⅴ和音を押さえる。4の指にh・シ、2の指にg・ソ、1の指にd・レ
- ⑥ トニック・Ⅰの和音を押さえる。5の指にc・ド、2の指にg・ソ、1の指にe・ミ
- ⑦ 上記①から⑥をリズムに併せて両手で演奏できるように反復練習のこと。

両手でこの四声体が流暢に弾けるようになるまで繰り返し復習う。

手順2；Cdurハ長調により両手で、楽譜のリズムに従って弾けるよう復習ったのちに同主短調のcmollを復習う。次に#、b3つの調合までの長調、短調に移調、移旋してこの定型を復習う。

その際に、全体の音域や各声部間の離隔等に留意する(赤p18)

手順3；更に全ての調性で弾けるようにする。そのため、必要に応じて移調、移旋した楽譜を自ら作成し、最初は見ながらでも良いが順次弾き覚え、暗譜を理想とする。

教師等に言葉で言われた調性で即座に弾けるまで復習うと良い。

その際にドイツ語や日本語で又は混合で指示してもらうと楽典用語との連携がとれて良い。

〈課題②〉

四度跳躍を伴う終止定型と属七の声部の動きの修得。移調のみ。移旋は行わない。

sol sol sol la re(do)si do
re fa mi

C: I V I IV II V₇ I

(留意点)

まず赤p34を参照されたい。ソプラノの動きre→si→doとその下に掲載された、小さな音符で示されている和声のソプラノla→re→si(→do)。レを四分音符レドと拍を分割すると、後半Ⅱ7の和音の響きになる。長調のⅡ7第七音は常に予備が必要であるが(黄p13)この様に経過的に主音を入れるならば特に予備の必然性は感ぜず、声部の流れとして味わえる。この「ラレドシ」という動きは西洋音楽、和声法の根幹をなす動きであり、とても活用範囲が広いので良く聴き分けること。

例えば、和声上級(緑p263, 反復進行, 229の項参照)で用いる反復進行の声部の動きを修得する際にひな形として機能し重宝する。すなわち四度上行した後に順次下

降して次の和音に進行する。ある声部でLa→re→do→siとした時、他の声部でre→so→fa→miと呼応する。このように声部進行の際にリズムや音程が類似した動きによって進行する掛け合いの動きを「模倣」と称し和声や対位法では重要な声部進行の「イデオム」、「動き」となる。課題2と3は移調のみ行い移旋は行わない。

何故ならば、移旋した事で、ソプラノにla b→reの増音程が発生するからである、和声全般、特に初級和声に於いては、増音程進行は全て禁止又は避けよと覚えること。

初期の三和音の連結では、共通音のない和音の連結において、ソプラノはバスと反行させ最も近い構成音へ進行し、且つ配分を一致せよとある。(赤p32共通音のない場合、参照)しかし、間もなくⅡ度→Ⅴ度に於ける保留しない推奨例や課題③のようにⅤ度Ⅵ度進行の結果現れる標準外配置の知識が要求される。

この様に標準連結は絶対的といえる規則ではないが(赤p123)最も初歩の段階では励行することで後に混乱が回避できる。

内声テノールに四分音符の動きを加わせる。属七の第七音の限定進行を意識しレ→ファ→ミと進行する妙味を覚えること。

手順1

左手

左手で上からソファレドと押さえる。

1の指g・ソ、2の指f・ファ、4の指d・レ、5の指c・ド

1の指から順にアルペジオで下降する音型を練習する。

次に押さえた指を楽譜の順に動かす。

トニック主音cを5の指で押さえる。

一定のテンポで弾けるまで復習う。

右手

① トニックのⅠの和音を先ず押さえる。5の指にg・ソ、3の指にe・ミ、1の指にc・ド

② ドミナントのⅤ和音を次に押さえる。5の指にg・ソ、2の指にd・レ、1の指にh・シ

③ トニックのⅠの和音を先ず押さえる。5の指にg・ソ、3の指にe・ミ、1の指にc・ド

④ サブドミナントのⅣ和音を押さえる。5の指にa・ラ、2の指にf・ファ、1の指にc・ド

⑤ サブドミナントのⅡ和音を押さえる。5の指にd・レ、2の指にa・ラ、1の指にf・ファ

⑥ ドミナントのⅤ和音を押さえる。5の指にh・シ、3の指にg・ソ、1の指にd・レ。更に、属七の限定進行を意識するため、Ⅴの和音のテノールに、四分音符の動きを1の指d・レ、2の指f・ファと四分音符で声部に動きがある。

⑦ 最後はトニック・Ⅰの和音を押さえる。5の指にc・ド、2の指にg・ソ、1の指にe・ミ

両手で和わせる

上記を実施後、両手で和わせてリズム通りに演奏し暗譜する。

手順2；全ての長調に移調演奏する。移旋はソプラノに増四度進行が生まれるので行わない。

〈課題3〉

V度VI度の連結。標準外配置VI度を伴う連結。及び属七の第七音の声部進行の動き。

do si do la re si do
re fa mi



C: I V VI IV II V₇ I

(留意点)

ソプラノは主音からはじめ尚かつV度VI度の偽終止(赤本p35)で標準外配置のVI度が生まれる。標準外配置のVIには主音が二つ含まれる。内声テノールの主音を保留する事でソプラノの豊かな動き, La→re→si→doが生まれ, これを味わうこと。(赤本p34)

課題②と同様に, 内声テノールに四分音符の動きを加え属七の限定進行を意識しながらレ→ファ→ミと進行する。

左手

左手で上からラソファレドと押さえる。

1の指 a・ラ, 2の指 g・ソ, 3の指 f・ファ, 4の指 d・レ, 5の指 c・ド

1の指から順にアルペジオで下降する音型を練習する。次に押さえた指を楽譜の順に, ドソラファレド, と動かしてみる。

ドミナント属音 g・ソを2の指で押さえ(3小節目後半)最後の小節トニック主音 c・ドを5の指で押さえる, 練習をしてみると良い

楽譜のバスラインをリズム通り一定のテンポで弾けるまで復習う。

右手

①トニックのIの和音を先ず押さえる。5の指にc・ド, 3の指にg・ソ, 1の指にe・ミ

②ドミナントのV和音を次に押さえる。5の指にh・シ, 2の指にg・ソ, 1の指にd・レ

③トニックのIの和音を先ず押さえる。5の指にc・ド, 3の指にe・ミ, 1の指にc・ド

④サブドミナントのIV和音を押さえる。4の指にa・ラ, 2の指にf・ファ, 1の指にc・ド

⑤サブドミナントのII和音を押さえる。5の指にd・レ, 2の指にa・ラ, 1の指にf・ファ

⑥ドミナントのV和音を押さえる。5の指にh・シ, 3の指にg・ソ, 1の指にd・レ

⑦トニックのIの和音を押さえる。5の指にc・ド, 2の指にg・ソ, 1の指にe・ミ

⑧属七の限定進行を意識するため, ⑥→⑦の段階で⑥部分のテノール声部に四分音符の動きを加える。

⑨1の指 d・レ→2の指 f・ファ→⑩

⑩1の指 e・ミ

両手で和わせて演奏する

〈課題3 捕捉〉

課題3はIV→IIの推奨されるソプラノの跳躍する動き(赤p34)を修得するためだが, 此の連結の際に, VI

度のソプラノ c・ドをIV度のソプラノ c・ドへと保留し, IVを密集配分としIVからIIへの進行では f・ファと a・ラはそれぞれ同じ声部で保留する。これで増四度の増音程進行がソプラノになくなり短調へ移旋も可能になるので, 発展課題としてゆとりのあるものは実施してみると良い。

この際のソプラノの動きを示すとドシドレシドとなる。

〈課題4〉

此の課題は開離和音の響きや和声の連結時に指が開きそれぞれ二声部ずつ, 左手バスとテノール, 右手ソプラノとアルトを担当する形を修得する。

V→VIの連結に伴う各声部進行の確認。

mi re do do do



C: I V VI IV I

(留意点)

V→VIの進行は連続や並達ができやすい。(赤p35)ので注意が必要。

本論では定型と称し各々の声部進行についての手順, 指示を以下に示すので紙面, 鍵盤とも参考になさり, 実施して頂きたい。

V→VI定型

V→VI定型各声部進行の手順

①Vの導音(第三音)を主音(VIの第三音)へ解決。

②Vの第五音 d・レをバスに反行させる。その際は主音へ下降進行させること。結果VIにはオクターブ又はユニゾン・同度として主音が二つ現れる事に成る。

③バス以外のもう一つの根音 g・ソはVIの第五音である e・ミへ下降させる。将来この音が f・ファとなり属七の第七音として下降限定進行に成るのである。

④V度に属七を使用する際, g・ソを重複した不完全形の属七(赤p70)は使用しない。構成音を全てそろえた属七を使用すること。

この課題では2オクターブ以上に和音が広がった連結をとまなうので各声部の動きを良く耳で確かめながら弾くと良い。

左手

①1の指でテノールのc・ドと5の指でバスのc・ドをオクターブで掴む。完全八度の響き。

②2の指でテノールのh・シと4の指でバスのg・ソを掴む。

③1の指でテノールのc・ドと3の指でバスのa・ラを掴む。

④2の指でテノールのa・ラと4の指でバスのf・ファを掴む。

⑤1の指でテノールのg・ソと5の指でバスのc・ドを

掴む。完全五度音程の響き。

右手

- ① 5の指でソプラノのe・ミと1の指でアルトのg・ソを掴む。
- ② 4の指でソプラノのd・レと2の指でアルトのg・ソを掴む。
- ③ 4の指でソプラノのc・ド、1の指でアルトのe・ミを掴む。
- ④ 5の指でソプラノのc・ド、2の指でアルトのf・ファを掴む。
- ⑤ 5の指でソプラノのc・ドと1の指でアルトのe・ミを掴む。

両手で和わせて演奏する

この課題中にあるV→VIの進行を偽終止といいそれにつづくIV→Iの進行を変終止、又は賛美歌の最後に歌われる文言から、アーメン終止等との俗称もある。

〈課題5-1〉

課題4にb3つを付けてcmoll・ハ短調に移旋して弾き覚える。更に全ての短調でこのカデンツを復習う。

mi b re do do do
Sofa mi b fare mi



C: I V7 VI IV+6 +I
ピカルディの三度

(留意点)

V度VI度の連結による標準外配置VI度を伴う連結に際しては、V度では属七の第七音f・ファがアルトに与えられ、主音の第三音・es・ミbへ下降限定進行する。同時にテノールの声部では導音として半音高められたh・シが主音に上行解決する。更にIVではアルト声部に付加六・d・レの音(赤p69, 138)が与えられ主和音の第三音へ進行する。その際に主和音の第三を半音上げる同主長調に終始する。これをピカルディーの三度とよび、バロック、古典をはじめ、実用例が多く実践的である。

左手

- ① 1の指でテノールのc・ドと5の指でバスのc・ドをオクターブで掴む。完全八度の響き。
- ② 2の指でテノールのh・シナチュラルと4の指でバスのg・ソを掴む。
- ③ 1の指でテノールのc・ドと3の指でバスのas・ラbを掴む。
- ④ 2の指でテノールのas・ラbと4の指でバスのf・ファを掴む。
- ⑤ 1の指でテノールのg・ソと5の指でバスのc・ドを掴む。完全五度音程の響き。

右手

- ① 5の指でソプラノのes・ミbと1の指でアルトのg・ソを掴む。
- ② 5の指でソプラノのd・レと2の指でアルトは2の指

g・ソ→1の指f・ファと四分音符で刻む。

- ③ 5の指でソプラノのc・ド、2の指でアルトのes・ミbを掴む。
- ④ 5の指でソプラノのc・ド、2の指でアルトのf・ファ→1の指でd・レを掴む。
- ⑤ 5の指でソプラノのc・ドと2の指でアルトのe・ミナチュラルを掴む。

両手で和わせて演奏する

〈課題5-2〉

開離・V7→VI・IV+6・ピカルディの三度



課題5-1のカデンツ最後の主和音ではアルトが第三音を担っている。この第三音をソプラノやテノールに配分することも可能である。発展的な課題としてソプラノにピカルディーの三度の主和音の第三音を持つてくる進行の手順を示します。

- ① V→VIの連結でVIが標準外配置と成ったテノールのc・ド音を保留し以下のような開離配置にする。
- ② ソプラノはアルト声部をオクターブあげて用いる。
- ③ 左手1の指c・ド、4の指f・ファ
- ④ 右手ソプラノ5の指f・ファ→4の指d・レ、アルトは1の指as・ラb
- ⑤ 最後のIの和音は
左手は1の指c・ド、5の指c・ド(オクターブ)
右手は1の指g・ソ、5の指e・ミと成ります。

以上で基礎編の実施手順は終了であるが、移調移旋をこなしそれぞれのバランスを良く考慮して弾いて頂きたい。

具体的には四声体のバランスが皆一応では平坦で趣に欠ける。ダイナミックをあえて付けるとすると、ソプラノはmf、バスはそれよりやや弱く、内声は更に弱いmpで演奏する。内声に特徴的な動きがある場合はやや強調しても良いだろう。

付録として基礎編の課題を再度纏めて示すので生徒に一題ずつ課題として与える。その際に、直筆で移させると良い。最近はデジタル機器に頼る傾向が強いのでは是非これを励行すると良い。実際に大譜表に移す作業もとても重要な作業である事は言うまでもない事である。

次回からは実践編となり、ソプラノとバスによる外声課題が中心と成るので、基礎編の課題を良く復習しておくことが重要である。

参考文献、参考書、参考文献共同著者など、付録

- ・和声 理論と実習 I, II, III (音楽之友社); 池内友次郎, 長谷川良夫, 石桁真礼生, 松本民之助, 矢代秋雄, 島岡 譲, 柏木俊夫, 丸田昭三, 小林秀雄, 三善見, 佐藤 眞, 南 弘明

- ・北村昭和声特訓集（仮称）；東京藝術大学図書館へ寄贈，
山本純ノ介他編纂
- ・標準音楽辞典（音楽之友社）
- ・楽典 理論と実習；石桁真礼生，末吉保雄，丸田昭三，
飯田 隆，金光和雄，飯沼信義（音楽之友社）
- ・対位法；長谷川良夫 著（音楽之友社）
- ・和声実施集（上）（下）；池内友次郎 編
- ・総合和声；島岡 譲 他

付 録

次頁参照

弾く課題 第1の基本

＃♭3つまで
全調移調
全調移旋

<1>C durで <2>c mollで

① 基本形とV

C: I VI IV II V I

② 長調のみ移調

C: I V I IV II V₇ I

③ VVI と ^ラⅣ^レⅡ^シⅤ^ドⅠ

③-1

C: I V VI IV II V₇ I

③-2

C: I V VI IV II V₇ I

④ 開離

C: I V VI IV I

⑤ 開離 V₇, IV₊₆ ピカルティの三度

⑤-1

c: I V₇ VI IV₊₆ +I
ピカルティの三度

⑤-2

c: I V₇ VI IV₊₆ +I
ピカルティの三度